

日本の先史時代と文化人類學

井 川 定 慶

一、記紀以前の日本

人類の起源は五十萬年前といふのが通説なるも或は六〇萬年、否やもつと遡ると考える學者もある。それから漸次進んで現在の高度の文明を導くまでに發達して來たのであるが、回顧せば原始時代から出發して今日に至つてゐるのである。日本民族もそして現在の日本の文明も悉くそれに端を發し我々が現に立つてゐる日本列島に於て第一歩を踏み出してゐると見るべきである。かかる意味に於て日本の原始社會の姿を正しく見極めることの必要が生じて來るのである。

更に遡つて日本民族となるまでの人類は如何に發達し成育したのであらうか。またその發成と日本民族及び日本列島との縦と横の關係はどうなつてゐるか。そこには人類に共通した一般的な發展を先づ考察する段階もあり、また別に日本民族独自の原始社會の研究も必要とされるのである。それらを科學的に正しく把握することが日本の先史時代研究の使命である。

人類は原始社會の段階を過ぎると次に民族を中心にして團結體をつくり、それが次には古代國家を形成するに至る。然らば日本の古代國家はどのようなにして形成されていたのであらうか。或る時期殊に太平洋戰爭以前にあつては我が日本の國つくりを神代から繼承する神話に基いて説明して來たのであるが、それを書きとどめてゐる古事記、日本書紀は共に八世紀の初めに編纂された歴史傳承を内容とするものであるから、冷靜に考える時にそのままに信ずることは無理であり現代の史學では許されないのである。

果して然らば古代の眞のすがたはどうであつたか。幸にして歴史學は近時著しい進歩を遂げ、人類學が科學的に進められ其の分野としての文化人類學が近年急に伸長し其の部分たる考古學、民族學といふ諸學問の研究成果に依つて、歴史學に近接し來り、それらが相互に助け合いがあり解明に役立つに至りつつあることを注目すべきである。とりわけ文化史學の研究に於て諸民族の文化の一般性、その發展の段階などを考えることによつて、未開社會の諸様相、文化の原初的形態を

見ることを得ていよゝ益々接觸を進め、歴史の探求に相俟つて解明を進めているのである。ここに於て最近アメリカのハーバート大學に於ける文化人類學の研究を大いに參酌する要を認めざるを得ない。

かくて歴史學の領域と民族學的領域との綜合研究が試みられようとしている。尚ほ今の歴史學が考えている所謂「古代の先史時代」と現時の民族學が問題としている未開社會に於ける現在も尚ほ存在する所謂「現代の先史時代」といふ此の二つを比考し併せ觀て考えるべきである。

また文獻の缺けている部分を考古學の取扱う遺物、遺蹟の調査研究によつて解明せられることは從來から多く行はれている。また我が國に缺けている文獻殊に記紀成立以前の時期を知る爲めに隣國の朝鮮半島並に中國に傳持されている金石文または典籍記載事項によつて知られたりまたは從來誤まり傳えられていたことを訂正することも最近になつて多いことを喚起しておきたい。

二、文化人類學

人類が出現して後、其の骨格のみを地層上に留めて人類の製作した遺物（道具）が殆んど止めない時代は人類學者、地質學者の研究に委ねて來たのである。それが石器時代、土器時代を経て金屬器時代に進み人類の智的水準が上昇して文字をつくり文書や記録を遺す文獻資料の豊富な時代に移つると歴史家が手を出して研究し解明するのである。

人類を取扱う學問にしても普通「人類學」と稱する時は主として體

質人類學を指している。此れに對し同じ人類を對象とする學問であつても考古學、民族學、社會學といふのは全く別個の分野におかれ、文化人類學にとり入れられているのである。

上記の「體質人類學」といふのは人間の骨格とか血液型、皮膚の色別などを取扱ひ醫學部解剖學科に屬せしめて研究している大學が多いのである。

人類を研究する學問の中で體質人類學以外のものを「文化人類學」として取扱うのである。此の中を人類言語學と考古學と民族學に細分することが出来る。

「人類言語學」は主として未開民族の言語を扱うもので是等の言語間の語族關係が言語變容などを扱っている。此の方法によつて未開とは云えない民族の言語を研究されることによつて、大いに歴史の補助學科となりうるのである。

「考古學」を佛の考古學者デ・モルガンは考古學の分野は人類の出現以前から始めて現代に至る人文の過程全部を探索する學問なりと幅廣く定義しているが人類學部での考古學は先史考古學が主となり、舊石器時代、新石器時代から青銅器、鐵器時に入り、更に進んで文獻歴史の初まるどころまでつづくのである。歐洲ではローマ王朝のはじめ、中國では周まで、日本では古墳時代の三、四世紀頃までを扱ふ。

新大陸では文獻歴史の初まるのがおそく、一五世紀、場所によつては一九世紀頃までを人類學者の扱う考古學の範圍になされている。考古學自體はここで終はるわけではなく、ローマ王朝以後は古典考古學と云つてギリシャ、ローマを扱う古典學科や美術學科で建築や美術を中心

とした考古學があり、王朝以後のエジプトに就ても文獻歴史を併用した考古學が行はれている。ただ文獻の出でくる時代は歴史家の扱う範圍であつて人類學の方ではふれないことになつてゐる。歴史時代に入つてからの考古學はアメリカでは「植民時代考古學 Colonial Archaeology」と別稱してゐる。即ち清教徒が最初に上陸したプリマス

(Plymouth) の住居跡の發掘やフィラデルフィヤ (Philadelphia) の最初の合衆國政權の占めた建物の發掘復舊などを行つてゐるのがそれである。また最近英國で産業考古學といふものがあつて産業革命時代の工場跡などを發掘してゐる。カナダのトロント大學の人類學部のヴァン・ストーンはエスキモーの研究で二〇世紀初頭のエスキモー遺蹟を掘つて割れた瓶やミルクの空缶などから此の型式の缶はカーネーション社で一九一〇年代に造つていたものだといふような年代を算定してゐる。その住居に子供の頃住んだことのあるエスキモーがまだ生きていて其れを連れて來て此の住居より向ふ側の住居の方が先きに建つたか、後から建つたかなど聞くといふような考古學もあることを注意しておきたい。

次に「民族學」である。主として未開民族の習慣風俗を比較研究するものである。

民族學の下部門として「民族誌」と「社會人類學」とがある。その「民族誌」は記述的な研究（理論的に對して）で舟の作り方、家の形、道具の作り方などを研究するものである。

日本で「民俗學」といつてゐるのは Folklore で文明民族の中に残つてゐる庶民の風習を蒐集研究するもので故柳田國男氏が民俗學を主

宰しもり育てて來た。

「社會人類學」は習慣、風俗の中で特に民族社會の構造や組織に焦點をおき、この場合、所謂る文明社會を此の對象とする事が多い。例えばアメリカの「シアトル日系人社會の社會組織」の研究の如きはそれである。

「社會人類學」では社會の變化（例えば日本文化の明治以後の變容）や文化と個人の心理との關係（例えば大和魂が日本文化全體とどういふ相互關係にあるかといふ事）も扱はれる。それで社會人類學は社會學、社會心理學、精神分析等とも近い關係におかれるのである。是れらは人類學者にとつて必要な副科目ではあるが、それは人類學そのものの中には入らない。社會學は文明社會を對象として發展して來たもので、多分に社會問題、社會福祉などの傾向があり、客觀的な比較研究を目的とする社會人類學とは聊か方向が異なる。

人類學は人類文化をたどり諸分野の協力が必要とする。舊石器時代を専門とする考古學者（フイリッパ・エドワード・スミス博士）にしても舊石器時代の遺蹟を掘つて理解するためには體質人類學で習つた化石人類の知識も必要とするし、石器の製法や用途を理解するには民族誌として習得した未開民族の石器の製法や用途の知識が随分と助けとなるのである。住居跡の堅穴から住居を想像したり、宗教や社會の構造を假定するには民族誌や社會人類學の知識が大いに參考として必要とせられる。人類の過去、そして現在にわたる地球上のさまじうの環境に於けるあらゆる様相を綜合して「人類」といふものを理解することが實は人類學の目標である。

三、歴史は動いている

魏志倭人傳の解釋、そして邪馬台國と卑彌呼の問題にしても新説が後を絶たないし、また此の日本列島に人間が住みついて生活を初めたことに就ても新説が出て從來の新石器時代に屬する縄文文化説は葬り去られている。

即ち一九三一年（昭和六）に早稻田大學直良信夫氏が明石市西八木の古い地層の土砂の中から人間の腰骨の化石を發見し、此れは洪積世人であることを學界に發表し明石原人の學名を得たのである。

また一九四七年（昭和二二）相澤忠行氏が群馬縣笠懸村岩宿の村道が切り通しにされてあらわれた崖の斷面のローム層に人間によつて加工された黒曜石片の含まれていることを發見し續いて石片、石器が發見され、そこには土器片がなく縄文文化以前の遺跡らしいことが知られ、其の後、明治大學の杉原莊介氏、芹澤長介氏（現東北大）によつて現地を調査されることによりローム層から握槌、搔器、剝片、石片など五十個ほど採集されている。即ち土器を伴はない石器が出土する遺跡、つまり舊石器時代の遺跡が日本にあつたのである。

尚ほ一九五七年（昭和三二）に大阪府藤井寺市美陵町國府遺跡からも打製石器が二個發見されている。

是れらの石器が「プレ縄文文化」（先縄文文化）といふ暫定用語で取扱はれる「無土器文化」時代の所産であることが知られるのである。

此の洪積世の日本列島には巨大な象がいた。現に瀬戸内海の海底か

ら漁夫の網にかかつて引上げられた象の化石の斷片が多數にあつて保管されている。その事から推して日本はその頃大陸とまだ分かれていなかったので象の渡來があつたと見るべきである。

大分縣丹生台地で一九五九年（昭和三四）日本最古の舊石器と想定される多數を發見している。但し是れは人が使用したものか自然石そのままの群集かに就ては學界で論議されつつあるが、此れに類する遺跡遺物がまたいづどこから發見されるかも知れない。

過去の事實は既に終了しているのであるが、其れを解釋し理解しようとする歴史觀は膠着してはならないので絶えず動き且つ新鮮さを示さなければならない。（昭和42・7・1）（本學教授）